

学 位 論 文 の 要 旨

学位記番号	※甲第 57 号	氏 名	富中 佑輔
論文題目	〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象の変容 ——佐伯千秋、倉橋由美子、柴田翔の作品を中心として——		
<p>本論は、一九五〇年代から一九六〇年代に現れた、〈女子生徒〉・〈女子学生〉を描いた小説の中で、彼女たちが一方的に眼差される対象とされたこと、いわば客体化されていたことを明らかにするとともに、〈一九六〇年代文学〉においては、その客体化に対して様々な方法で〈抵抗〉する様子が描き出されていたことを明らかにするものである。併せて、五〇年代から六〇年代にかけての客体化自体をめぐる視座の変化からは、戦後期に夢見られた新世代による対等な男女関係を基盤とした民主主義社会という理想像が、これらの期間を通じて力を失っていったことが副次的に明らかとなっている。こちらは、柴田翔「されど われらが日々——」がベストセラー化した現象や、〈ジュニア小説〉が六〇年代後半に性的な娯楽物語として消費された現象と深く関わる事項である。</p> <p>本論では、男女共学化が成立した公教育空間において、最初期に初等・中等教育を享受した世代を対象読者に想定して発表された、一九五〇年代から一九六〇年代の小説を分析対象とした。アジア太平洋戦争を挟む戦前・戦時教育と戦後教育との間に生じた制度的な懸隔は大きく、また、もたらされた変化は多項目に及ぶが、初等教育、中等教育において際立っていたのが一九四七年から始まる新制中学校、新制高等学校における男女共学化政策であった。男女共学の導入は、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）によって執行された日本の民主化政策の一環として実施され、女性の権利保護、男女同権意識の浸透、女性の社会進出を促すことなどを目的として開始された。</p> <p>男女共学化した新制学校での教育を享受した世代は、一九四八年度の新制高等学校の一期生に当たる一九三二年以降に生まれた。中でも一九四一年以降に生まれた世代は、一九四七年度に初めて新制小学校に入学し、以降の公教育すべてを新制で経験している。こうした新制小学校育ち世代が一〇代半ばとなった一九五六年ごろ、これらの世代を対象読者として、小学館『女学生の友』誌上で本格的に登場したのが男女共学化した学校空間を前提として男女生徒の交際を描く〈ジュニア小説〉という文学ジャンルであった。</p> <p>では、男女共学化した学校空間で男女平等・男女同権という理念を学び、〈ジュニア小説〉を受容した彼女・彼らが大学生となり、参加することになった学生運動という〈場〉において、対等な男女関係の構築は成し遂げられたのだろうか。『女学生の友』編集長であった桜田正樹が、高校を卒業した後の〈ジュニア小説〉読者を対象に創刊した女性誌『マドモアゼル』には、六〇年安保闘争の中で命を落とした樺美智子の〈神話化〉に〈抵抗〉するようにして、倉橋由美子が「死んだ眼」（一九六〇年九月号）を発表している。この小説は、男性（あるいは男性社会）から一方的に眼差され、客体化される女子学生を描いていた。倉橋は一九六二年にも、「蠍たち」という作品で一方的に客体化される〈女子学生〉を語り手に設定し、一方的な客体化への〈抵抗〉を描いている。</p> <p>本論の目的は、同じ世代を対象読者として発表された一九五〇年代から一九六〇年代にかけての小説に登場する女子生徒・女子学生〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象を分析することにより、そこに描き出される高度経済成長初期の日本社会における女性ジェンダーの置かれていた構図を明らかにする点にある。</p> <p>こうした目論見のもと、〈ジュニア小説〉を扱う第一部と六〇年安保等を中心に学生運動を描いた倉橋由美子と柴田翔による作品を扱う第二部という二部構成をとっている。</p>			

第一部の第一章から第三章では、〈ジュニア小説〉の代表的作家と見做されていた佐伯千秋（一九二五年～二〇〇八年）の作品に注目する。

第一章では、佐伯千秋の〈ジュニア小説〉の特徴について、佐伯の随想「現代っ子の言葉」（『こどもの暮らし』第一号、一九七五年七月）を用いながら整理した。随想をはじめとした資料群からは、佐伯の創作意欲が読者である戦後育ちの「現代っ子」たちに対する、多分に教育的な使命感から発していることが読み取れる。また佐伯は、たびたび自らの作品に付した「作者の言葉」の中で、一読者から寄せられた悩み相談のファンレターに対する〈返答〉〈回答〉を込めたものとして作品を位置づけた。これは作家と少女読者とが、悩みの告白とその解決を通じて連帯していたという、〈ジュニア小説〉特有の消費行動に潜む意識が示唆されている。読者を母親のように守り育てようとする佐伯の作家的使命感は、確かに少女読者を導くものであった。だが同時にそれは、〈ジュニア小説〉という文学ジャンルが、理想主義的なモラルに基づくメッセージを発信する必要があるために、社会が是とする行動の結果として少女の幸福を描かざるを得ないという限界を示してもいた。

第二章では、佐伯千秋世代の〈ジュニア小説〉に対する批判意識が読み取れる夢枕獏（一九五一～）の山岳SF小説「山を生んだ男」（『奇想天外』一九七八年十一月号）と、佐伯千秋による山岳部での登山活動を描いた〈ジュニア小説〉である「山頂にバラあり」（『ジュニア文芸』一九六九年一〇月号）を比較検討している。「山頂にバラあり」の分析を通して、ファンレターに対する〈返答〉〈回答〉としての〈ジュニア小説〉の方法を具体的に明らかにするとともに、同作とは対照的に孤独な登山を描く「山を生んだ男」の分析から、先行研究において〈ジュニア小説〉の後継ジャンルと見做されている一九七〇年代以降の〈コバルト小説〉が、理想主義的な男女共学的な共同体を必要としていないことが明示された。

第三章では、一九五九年に第八回小学館児童文化賞を受賞した佐伯の初期代表作である「燃えよ黄の花」（『女学生の友』一九五八年九月号）を取り上げる。同作では、広島に投下された原子爆弾によって「黒こげ」となったヒロイン・三千代の死体が描写される。三千代は実際に被爆して亡くなった佐伯の従妹をモデルとして執筆されており、思い合う男子生徒に佐伯自身が仮託されたものとして読むことができる。同作は「黒こげ」となった〈女子生徒〉を描くことで読者であった女子生徒に強い印象を与えたと思われるが、〈女子生徒〉の死を消費するメロドラマから抜け出すことに成功したとは言えない。佐伯が〈女子生徒〉を「黒こげ」にし、その悲劇性をもって戦争の悲惨さを訴えた「燃えよ黄の花」から、六〇年安保の渦中で斃れた樺美智子の死が〈神話化〉されるまで二年と離れてはいなかった。

第二部では、倉橋由美子（一九三五年～二〇〇五年）の「死んだ眼」（一九六〇年）と同じく倉橋の「蠍たち」（『小説中央公論』一九六二年）をテキストとして扱っている。

第一章では、「死んだ眼」の内容を読解するとともに、掲載誌である『マドモアゼル』一九六〇年月号の樺美智子へのインタビュー記事の記述を分析することで、『マドモアゼル』誌が樺美智子を、死を予感しながらも安保闘争に参加した〈聖女〉として扱う姿勢を持ち、倉橋に樺への共感を期待して作品を依頼しているであろうことが見えてきた。これに対して倉橋は、同誌に掲載された樺へのインタビュー記事の、読者に向けて記者が一人称で呼びかける文体を思わせる一人称文体を選択。樺の死を「くだらない、ばかばかしい、救いようのない死だと思ふ」と述べる内容を『マドモアゼル』に送り込んだ。樺の死をどのような形であれ〈神話化〉することは、『マドモアゼル』誌の読者である女性たちを他者の都合により一方的に眼差し客体化することに通じるからである。

第二章では、「蠍たち」に登場する麻酔分析およびテープレコーダーについて調査し、当時それら

様式 B

が有していたイメージや背負っていた文化的文脈を踏まえた上で、作品冒頭に付されている但し書きに注目した。そこからは、Lの口述が、アメリカ的な文化や制度を精査せずよいものとして受容し施行する日本社会に対する〈抵抗〉の様相を呈していたことが明らかとなる。同作ではLの肉声が「精神鑑定書の原資料」として加工されていく過程を示すことによって、一九六〇年代初頭の日本社会が、一九五〇年代の男女ジェンダーの不均衡な構図を引き継いでおり、しかもその構図が、公的権力の行使されるまさにその行為の内に潜在化していた様を暗示しているのである。

第三章では、〈ジュニア小説〉を最初に受容し、倉橋由美子によって〈抵抗〉する者として表象された一九四〇年代生まれ世代が、就職や結婚によって社会に出ていく際の苦悩を描いているとして捉えられた柴田翔（一九三五年～）の「されど われが日々——」（一九六三年／一九六四年）のベストセラー化に注目している。同作は一九六二年に書かれ、一九六三年に柴田の大学時代以来の友人と結成した「象の会」発行の『象』七号に発表された。『文學界』一九六四年四月号に転載され、芥川龍之介賞を受賞した同作は、単行本化され柴田の想定したものとは異なる世代に受容されることになる。自分たちの世代の物語であると「誤読」して受容した一九四〇年代生まれ世代に注目することにより、一九五〇年代を描いた同作が一九六〇年代以降の若者像として読まれたことでベストセラー化していった現象の意味を考察している。

以上、フィクションに描かれた〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象の変遷と変容を辿ることによって、戦後初めて新制学校で公教育を享受した世代の苦悩、そして〈抵抗〉を論じた。思春期にアジア太平洋戦争と敗戦を経験した佐伯千秋が、戦後、対等な男女関係を基盤として成立する新しい民主主義社会の実現、という理想像を新世代の読者に期待して執筆した〈ジュニア小説〉の中の〈女子生徒〉表象から、実際に戦後社会の中で初等・中等教育を経験した倉橋由美子や柴田翔の描いた社会から求められる姿や在り方に〈抵抗〉する、あるいは〈抵抗〉せざるを得なくなった〈女子学生〉表象や元〈女子学生〉表象への変容が、明確に浮かび上がってきた。終戦直後に夢見られた理想像の実現は少女たちに託されたが、やがてそこに潜在する欺瞞性が顕在化する。それに伴い変容していった〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象には、高度経済成長初期における日本社会の構図が刻印されていたのである。